
荒国に蘭

亜薇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒国に蘭

【Nコード】

N4162BA

【作者名】

亜薇

【あらすじ】

「何があるうと、私は逃げたくない。」比類なき神力と武才、絶世の美貌を与えられた少女麗蘭。孤児として育ちながらも、自分には人にならない特別な『宿命』があることを感じ取っていた——大国の侵略にあえぐ帝国の『皇女』であり、天帝に仕える『神巫女』でもある麗蘭が、己が使命に目覚め仲間と共に成長していく物語。【荒国に蘭】では、麗蘭は皇女という自分の身分を知らず、都を離れて山奥で暮らしている。世にも美しい邪神『黒龍』やその異母弟『邪龍』などの敵、仕えるべき天帝『聖龍』と出会い、戦いの道へ進む

決意を固めてゆく。（作者サイト「楽園喪失」に載せたものに修正を加えたものです。）

序

其の昔

神々の王 天帝 聖龍神は

此の世に蔓延る数々の悪から力弱き人間を救うべく、
己の神力を与えて一人の女をお創りになった。

彼女の女、名を 霜 奈雷

清麗かつ聡明、偉大な神力を用いて妖を討つ
“神巫女” “光龍” である彼女の女は 死ぬ度に転生する魂を持つ。

五百年ごとに生を受ける光龍
大いなる力でその度使命を全うする。

奈雷没後千五百年、
新たな光龍——清 麗蘭
人界に再び下される。

序

暗く、湿った洞穴の中。もう何百年も人々に忘れ去られた地である。

静寂が流れ、時折滴り落ちる水の音のみが鳴り響く。

…突如、そこに光の筋が現れた。

全てが静止しているその場所で、それは一際神々しく映る。

眩い程の光の洪水の向こうからまるで空間に浮き出るように、「
彼」は静かに現れた。

細く滑らかな黒い髪にすらりとした体躯、黒曜石の如く輝く黒い
双眸。一見女と見紛う、此の世のものとは思えぬ程の美貌。

「やっと、出て来られたか。」

その美しい声は、冷たい空気に乗って低く鳴り響く。

「…千五百年。恐らく未だその程度だろう。それにしては、随分長く待ったように感じるものだ。」

外套を翻し流れる長い髪を白い手で結い上げた彼は、ゆっくりと歩き出す。そして、側に倒れていた白刃の剣を拾いその刃に目を落とす…凍り付くような笑みを湛えたまま。

「兄上、こんな封では長く保^もたぬと分かっていたであろうに。」

その笑みは、全てを呑み込む程深遠な、闇。

「僕は僕の、『宿』^{しゆく}を果たすでしょう。此の道を選び取ったのだから……」

> i 3 8 9 1 0
— 4 8 4 8 <

降臨（前書き）

主人公、麗蘭誕生。

降臨

聖安帝国が北方、帝都紫瑤^{しやう}の中央にある燈凰宮。

嵐：大雨と共に雷鳴が轟く日——聖安の第一皇女麗蘭が生を受けた。

此の帝国では特別な場合を除き、第一子が第一位の皇位継承権を持つ。ゆえに、此の麗蘭は生まれながらに女帝となる「宿」をもつ皇女だった。

「お生まれになりました。皇女さまでございます。」

赤子を取り上げた下女が嬉しそうに告げる。

皇女誕生の報を聞き付け、皇帝や控えていた十名程の臣たちが産室へとやって来る。

それは龍王朝と呼ばれた時代の、甬帝^{じゆう}の治世二年目、盛夏の日。

「珍しい深紫の瞳。まるで玉のようではないか。」

年若い皇帝はたった今授かった娘を抱き、満面の笑みを零す。命の力に満ちた産声を上げて、その姫は此の世に迎えられた。

「屹度^{きつと}聖妃のように美しく、気高い女帝となるに違いない。」

未来の女帝となるその赤子を見て、聖妃の寝台から離れた位置に控えている臣下たちも嬉しそうに微笑んでいる。しかし、穏やかで幸せな時間は長く続かなかった。

「…陛下！ その御子の、左肩に…」

最初に気付いたのは、禁軍属の女將軍璋風友ふうゆうだった。

「…これは、まさか…」

甬帝が言われた通りの場所を確認する。自らの腕の中にいる小さな娘の小さな肩に、確かにそれが在った。

「天帝聖龍神の御印…？」

——人界、天界、魔界。

此の天治界てんちがい全てを統治する神々の王、天帝聖龍神。

麗蘭の左肩にはその僕である証、白龍の印がはつきり表れていた。それが意味することは只一つ。彼女が神巫女「光龍」であるということ。

「光龍は五百年に一度人界に下されるといいます。では、此の姫が正しく…」

風友がそう言いかけた時。

「何ということ…！可哀相に…こんな時に…」

皇女の母、皇妃である聖妃は、半ば悲痛とも取れる面持ちで寝台から身を起こした。

本来ならば、世継ぎが神々に愛される神巫女であることに感謝し心より祝福したいところだが、今の此の国では難しいことだったのだ。

「此の御子を此のままにしておけば、珠玉が黙っていません。」

聖安は数年前より、東の大国茗^{めい}帝国と戦争状態にあった。

茗の女帝である珠玉は、帝としても将としても大陸六国中にその名を知られた女傑。人界全統一という途方もない野心を抱き、一国一國兵を送り、戦争を起こして侵略を繰り返していた。

彼女は冷酷な悪女として、自らの野望のためには手段を選ばない女。神にも等しい力を持つ神巫女が生まれたと知れば、必ず利用しようとして手を打ってくるだろう。

聖安は六国の中でも決して弱い国ではなかったが、十数年前王朝が交代したばかりで国内の混乱が続き、更に年若い甬帝と聖妃の統治も日が浅く真っ先に珠玉の標的となっていたのだ。

「どうしたものか、聖妃よ…」

麗蘭、と名付けられた小さな姫は、何時の間にか眠っている。彼女を見守る父や母、そしてその場に集った忠臣たちの心配など何も知らぬまま。

聖妃はその安らかな娘の顔を見てから、目を逸らす。

「陛下、隠しましょう、此の姫を。」

「…何？」

甬帝だけではない、その場に居合わせた重臣の誰もが、自分の耳を疑った。

「…風友。」

「此処に。」

聖妃の呼びかけに答え、女將軍は前に出る。

「此の子を此処から連れ出し、武の術や知恵を授けて下さい。」

「聖妃、何という…」

「無謀、とは承知。けれど、此のまま此処で成長すればば間違はなく珠帝の知ることとなり、奪い去られかねません。」

珠玉は、自分より上のものを認めない。支配下に置くことが出来なければ、麗蘭に危険が及ぶことは必至だった。

「神巫女をお守りするだけでなく、わたくしたちには娘を守る義務があります。」

「陛下…」

聖妃は揺るがず、風友を見上げる。

「麗蘭には、何者にも屈することのない強い子に育って欲しい。」

周囲は沈黙を守っている。聖妃の固い決意の眼差しに、甬帝は重々しく頷いた。

「…わかった、そうすることとしよう…引き受けてくれるな？ 璋將軍。」

「…御意。及ばずながら力を尽くします。」

その言葉を確かに聞くと、甬帝は重臣たちに向って告げた。

「皆、聞け。世継ぎの皇女『麗蘭』は、時が来るまで璋將軍のもとに預けられ、一平民として育てられる。本日皇女が生まれたこと

は、 此処にいる者のみ知るものとし、 口外した者は厳罰に処する。
」

甬帝の言葉通り、 麗蘭の誕生は隠された。 皇宮中、 そして国中に、 第一皇女が死産したという報が伝えられる。

国中が悲しみに暮れる中、 麗蘭は秘かに「宿」を以て下されたのだ。

邂逅へ1（前書き）

麗蘭7歳。

これで7歳？という感じですが…

邂逅〈1〉

かくして第一皇女麗蘭を託された風友は、將軍を辞し帝都を離れ、帝国の南方に位置する阿宋山あそうざんで小さな“孤校”ここうを開いた。

“孤校”とは、身寄りのない子供たちを集め住まわせ、学問を教える場所である。

麗蘭はいずれ帝都に戻り、皇位を次いで女帝となる身。彼女を預かり育てるには、他の臣下に示しをつけるため風友が將軍で居続けるわけにはいかなかったのだ。

あの、嵐の日から七年。

麗蘭は風友と共に、十数人の孤児達と暮らしていた。

自分が皇女であることを知らず

神巫女「光龍」であることを知らず――

「お早うございます、風友さま。」

「お早う。」

風友はその長い髪を後ろで束ねて背に流し、静かに畳の上に正座

している。麗蘭も師に向かい合って腰を下ろした。

聖安禁軍にその人ありと言われ、甬帝や聖妃の厚い信頼を得ていた風友は現役を退いて久しい。しかし未だ三〇代半ばと歳若く、孤校で子供たちを育てながらもかつての同胞たちと連絡を取り、激しさを増していく茗との戦いで少しでも故国の力になるべく動いていた。

少女の頃から軍人として活躍してきただけあり、ぴんと伸びた背筋や所作から厳しく引き締まった美しさが垣間見える。落ち着いた雰囲気や表情、身のこなしが彼女を実年齢よりもやや上に見せていた。

「昨日、琿加將軍^{ぐんか}にお会いしたよ。またお前の弓を褒めていた。」
「左様ですか、嬉しゅうございます。」

麗蘭はほんの少し、頬を赤く染めながらもきはきと応える。
それはまるで、嬉しさを押し隠しているかのような微笑ましい様子だった。

珍しい太陽色の髪を高く結い、長い睫毛に縁取られた瞳の色は深い紫。形の良い鼻に柔らかな唇、薔薇色の頬。麗蘭は、正しく神に愛される巫女と呼ばれるに相応しい、美しい少女に成長していた。

年のわりに大人びてしっかりした顔付きに、真っ直ぐ背を伸ばした凛とした姿。幼くして、他の子供たちとは違う高貴な品格を兼ね備えていた。

孤校の子供たちは、毎朝主室で揃って朝餉を取る。風友に学問を教わるのも主に此処だ。

子供たちが楽しそうにお喋りをしている中で、麗蘭はたった一人いつも輪に入らずにいた。

「また麗蘭が風友さまに褒められている。」

此処にいる子供たちは、ほとんどが麗蘭よりも年上の子ばかり。学問も武芸も、他のどの者よりも抜きん出て優れている麗蘭は、そんな彼らに妬まれ敬遠されていた。

無論、風友が麗蘭を鼻屑目に見ていたわけではない。彼女の才は紛れもなく本物であるということと、子供たちが麗蘭に偏見を持ち、それを疑わなかった所為である。

風友は何かと麗蘭が孤立しているのに気付いていた。しかし、敢えて何も言おうとはせず見守っているだけだった。

「麗蘭、食事が終わったら外に薪を取りに行ってくれないか？」
「わかりました。」

いつものように静かに朝食を取り終わると、麗蘭は席を立った。

麗蘭は、風友の言い付け通り薪を抱えて蔵を出た。

近頃森にはよく魔物が出るようになった。子供たちは「自分たちだけで孤校の外を歩き回るな。」と風友に言い聞かせられている。

しかし麗蘭は違った。既に彼女は、自分の身を守る術を身に付けている。

物心付いた頃から、麗蘭は自分が他の子供とは違うことに気付いていた。皆が感じ取れないものを感じ取ることができ、誰よりも弓、

剣で優れ、誰よりも学問が良くてきた。

そして、何より彼女は知っていた。

自分には何か、やらなければならないことがあると。

誰に教えられたわけでもない。ただただ知っていた。自分は何か、特別な「宿」を持って生まれて来たのだと。

子供たちは皆麗蘭を遠ざける。麗蘭も、自分は彼らと相容れない
と思っている。

——皆と自分が違うのならば、自分は何のためにいるのだろうか？何をすればいいのだろうか？

彼女はいつもそのことばかり考えていた。

そしてそれを、育ての親である風友にすら話せずにいる。

「雲行きが怪しい…早く帰ろう。」

麗蘭は薪を抱えたまま山道を駆け上がる。

雲行きだけではなかった。

麗蘭は、森の様子がいつもと違うことに気付き始めていた。

突然、ぴたりと足を止めて振り返る。何か、暗く気味の悪いものを感じたのだ。

それは優れた神人かみひとでなければ感じ取れない邪悪の気。

神人とは神力を備えた人間のことで、稀に生まれる貴重な存在である。風友や麗蘭、聖妃も此れにあたる。

麗蘭は薪を道の横に置き、背負っていた弓と矢を手にした。
がさがさと、物音がする…近付いて来る。

そしてその邪気は、一つから二つ、三つ、四つに分かれていく。
やがて、邪気はその正体を現した。

黒い鬣、大きな狼のような異形が真赤な目をおかつと見開いている。
それが廳蟲ちようこという妖だと彼女にはわかった。

未だかつてその魔物を直接目にしたことはなかったが、風友から
学んだ妖怪の知識、そしてこれまで感じた事のない程の邪気から彼
女はそう判断したのだ。

——何故、こんな所に廳蟲が？

妖の中でも強い妖気を持つ此の異形が四頭も。此の状況は稀とい
うより異常だった。

彼女の記憶によると、廳蟲は魔界の妖怪で人界に出ることはない
はずだ。

麗蘭は後退あとずさりする。一人で、弓矢だけという装備で、相手に出来
るとはとも思えない。

そうしている間にも、化け物はじりじりと麗蘭を追いつめる。し
かし、彼女は悲鳴一つ上げない。彼女は知っていたのだ、此処で動
じれば、その瞬間自分は化け物に喰われると。

麗蘭は意を決し弓を構える。そして、大きく息を吐いた。

「…来い！」

凜然とした彼女の声に応えるかのように、四つの黒い塊が彼女に

襲い掛かる。

鋭い爪を剥き出しにして、一足飛びで向かって来る。あの爪にやられては一溜まりもないだろう。

麗蘭は狙いを定めて弓を引く。その矢は見事に命中し、一頭の片目を射抜く。射抜かれた一頭は、堪らず森の奥へ消えて行く。

麗蘭の矢尻には、妖怪が嫌う「呪^{しゅ}」をかけてある。ゆえに、急所に当てれば一本でも効果を發揮するのだ。

残りの背後からの二頭、正面からの一頭の爪を避け、今度は化け物の後方から引く。

一頭の頭に命中したが、射られた廳蠱は倒れる寸前麗蘭の背中を引き裂いた。

「くっ…！」

背中に熱が集中して行くのが分かる。感覚が麻痺しそうになる程の、じんじんとした激痛が走る。

反射的に右手を翳し、攻撃の呪を唱える。すると眩い光が放たれ、神力で残りの廳蠱が吹き飛ばされた。

しかしそれは時間稼ぎに過ぎない。此の一撃でかなりの体力を消耗してしまった。

小さな身体に大きな傷、流れていく血。立っているのがやっとで、痛みに耐えるのがやっと。

体勢を立て直し再び向かって来る化け物に、弓を構えるのが遅れる。麗蘭は瞬間、諦めかけた。

「麗蘭…！」

聞き覚えのある声が森中に、響く。

…風友の声だ。

走って駆け付けた風友は抜剣して二度大きく振り、二頭の化け物をばっさりと斬る。

赤い血を上げ、断末の呻き声を上げながら倒れた怪物は直に動かなくなっていた。

「風友…さま…」

安心した途端、麗蘭の身体を支えていた緊張が一気に解ける。

化け物の姿、風友の姿がだんだん揺らいで、見えなくなつてゆく。

——血が流れすぎた。死ぬのか？此処で…こんな所で…！！

「麗蘭、しっかりしなさい！麗蘭！！」

風友の声が小さくなっていく。

彼女の姿、周囲の景色…何もかもが、視界から消えていった。

邂逅へ1（後書き）

次回、登場です。

邂逅へ2 (前書き)

作者が大鼻屑のあのお方が登場。

邂逅へ2

寒くて、暗い。
そして恐ろしい。

——此処は何処？誰もいない。私一人だけ…？
違う。誰か…誰かの声がある。

「麗蘭。」

低い、大人の男の声だった。

「お前は…誰だ？」

視界を覆い隠す暗闇で、男の姿を確認することはできない。
彼女の問いかけには答えずに、彼の次の言葉が飛んでくる。

「…やっと、見つけた。幾万幾千の夜を越えて、漸く会えた。」

「誰だ？そこにいるのは…」

次の瞬間、闇が晴れ、視界が開けていく。見たこともない光景が
目の前に広がっていく。
見慣れた阿宋山の森ではない。薄暗く、動物達はおろか、風の吹
く気配すら感じられない静寂とした森。

…現れたのは、一人の男。黒の双眸に高く結い上げた長い黒の髪。

その異様な“気”で、麗蘭には彼が人ではないことが判る。

足音も立てずに彼は麗蘭に近付いていく。近くで見ることにより彼の「異質」に気付く。

麗蘭の目の前まで来ると、彼はその美しい貌に穏やかな笑みを浮かべた。

「僕は、いと高き叛逆者。」

彼の言葉で、麗蘭はそれが意味するものをすぐ理解出来た。

天帝聖龍神が統治する此の天治界において、「いと高き叛逆者」が示す者はたった一人。

「黒…龍…」

それは、古くから伝わる黒の神の名。

幾百の神々が存在するという此の世界で、黒い髪、黒い瞳をもつ神は黒神くろがみしかないという。

黒龍神くろりゅうじんは、静かに微笑んだまま。その黒曜石のような深い瞳に惹きつけられて、吸い込まれそうになる。

——なぜ、こんなに悲しい目をしているのだろうか？

「君は、いずれ知ることになる。君は一体何者なのか、何処から来て何処へ行くのか…君の『宿』は何なのか。」

宿。それは、全ての人間が神々に与えられた、今生で為すべき使命のこと。

「君はこれから、長い長い旅路をゆかねばならない…君は普通の人間とは違う。それは分かっているね？」

麗蘭は頷く。

「君の宿は魂に刻まれている。君の魂は、死んでも再び転生し、神々のため、人間のために、人界の悪を滅ぼすために戦い続ける…君は『光龍』。『神巫女』という名の、神の傀儡。」

彼女には、此の神が何を言っているのか、直ぐには理解出来なかった。

「安穩は許されない。君は此の先、その女の身で果てのない試練に挑まなければならない…しかし、逃げることは可能だ。君は選択することが出来る。」

「…逃げる？」

麗蘭は此れまでずっと、自分が与えられた「宿」は何なのか、答を求め続けてきた。自分が為すべきことは何なのか、探し続けた。

「逃げるか、戦いの道へ入るか二つに一つ。君は選なければならない。」

ほとんど間を空けず、考えることも無く…自分でも不思議な位、自然に麗蘭は首を横に振っていた。

「何があるつと、私は逃げたくない。」

黒龍神の言うことは、完全には解らないけれど。

兎に角、自分は逃げたくない。只それだけだった。

彼女の一片の迷いもない強い言葉を聞いて、黒龍神は再び微笑んだ。

「…それもいい。では今此の瞬間から、僕と君は敵同士…次に見^まえる時は、君は僕に敵意を抱いているだろう。」

黒い神は、踵を返して歩き出す。そしてその姿を再び森の深くへと消してゆく。

「また、会おう。その日まで『宿』の通り己を貫き、戦い続けることが出来るかどうか…楽しみにしているよ。」

彼の姿が見えなくなると、再び辺りが暗くなっていく。何も見えなくなっていく――

> i 3 8 9 4 8 — 4 8 4 8 <

邂逅へ3 (前書き)

明かされる真実。

邂逅〈3〉

「…麗蘭！麗蘭！！」

心配そうに麗蘭を覗き込んでいたのは風友だった。麗蘭はゆっくりと、元の世界へ引き戻されていく。

「風友さま…？」

そこはまだ森の中だった。背中が酷く痛み、動けない。

「お前は本当に無茶をするな。」

半ば呆れ、半ば安心したような風友の声。序々に記憶が蘇ってくる…自分は化け物と戦っていたはずだった。

「私は確か、廳靈と戦っていて…」

風友が頷く。

「…危ない所を、風友さまに助けて頂いて…」

「それから、暫らく気を失っていたのだ。」

師の言葉でおぼろげだったものを思い出し、溜め息をつく。どうやら自分は何とか助かったようだ。

「…ありがとうございます。それと…申し訳ありません。」

己の力を過信して危険に飛び込んで入ってはならない。麗蘭は常々そう言い聞かせられていた。

あの時も、戦おうとせずに廳蠱たちの注意を逸らし、孤校に戻って風友に助けを求めることも出来たはずだ。

しかし、そう出来なかったのにも訳があった。

「…解っている。孤校に戻れば、他の子供に危害が及ぶかもしれぬ。麓まで走れば、民家が襲われるかもしれぬ…そう思ったのだろうか？」

麗蘭は頷いた。風友は、どうしてもお見通しなのだろうか。

「しかし何故廳蠱が現れたのか、見当がつかぬ。あれは人界には出ないと言われているし、魔界でもそうは見られないらしい。私は魔界に数度行ったことがあるが…実際に見たことはなかった。」

普通の人間が、別世界である「魔界」に関わることはほとんどない。しかし、聖安帝国は魔界の魔族たちと同盟関係にあったため、風友は仕事で何度か訪れたことがあった。

…そう、廳蠱は人界に出たりしない。だとすれば、一つしか考えられない。

「…黒龍神が差し向けたのです。」

「黒龍神？」

突然その名を聞いて、風友は瞠目した。人間たちにとって「神」という存在は、神話や伝説の中だけの存在だったのだ。

「…私にも、良く解りませぬ。ただそう名乗っておりましたし、気配も人間のものではなく…言い伝えの通り黒い髪に黒い瞳でした。そういう特徴の神は、黒神しか存在しないのでしょうか？」

此の世界には、とある言い伝えがある。誰もが知っている銀神と黒神の神話だ。

…此の世は、三つの世界に分かれている。

人間が住む人界、魔族が住む魔界、そして神々が住まう天界。

幾百の神々の中でも、頂点に君臨する王を天帝と呼ぶ。かつて天地を開闢し、神、人、魔族その他全ての生き物を創った最初の天帝は「神王^{しんおう}」。

神王には、双子の天子がいた。一人は、次代の天帝となるべく生まれた兄。そしてもう一人は、此の世を崩壊させるべく生まれた弟。神王は、兄に聖龍、弟に黒龍という“神名^{しんめい}”を与える。“神名”とは、神格を表す神の称号である。

今から数えて約一五〇〇年の昔。彼ら双神によって、力の弱い人間たちを救い、守る使命を下された人間が“神巫女”である。聖龍神は「光龍」を、黒龍神は「闇龍^{やみりゅう}」を創り、人界に遣わした。

その後乱心した黒龍神は、天宮で反乱を起こし自ら父神王を弑逆した。此れを“天宮の戮^{てんきゅう}”と呼ぶ。

聖龍神は、黒龍神と対峙し剣を交えて戦った。黒龍神は敗れ地に墮とされ、人界に封印される。その後聖龍神は、弑された神王を継ぎ天帝と為ったという。

「…会ったのか？黒龍神に。」

「はい…確かに、私が“光龍”だと言いました。」

こんなことを言えば風友は驚くに違いない、そう思っていた。しかし、風友は腕を組み考え込むだけだった。

「驚かないのですか？」

「驚くも何も…黒龍神までもが現れたなら、本当なのだろう。」

やはりそうかという口振りだった。

「風友さまは、ご存じだったのですか？ 私が光龍だと…」

風友は頷く。

「…お前には、龍の印がある。」

麗蘭は光龍。それが、風友が麗蘭を預かった理由でもあったのだ。しかし、まだ全てを話すわけにはいかなかった。麗蘭が聖安の皇女であり、敵国にその力を利用させないため、こうして隠されていることは。

寧ろ、風友は麗蘭の反応が意外だった。

「お前も、余り驚いていないようだな。」

「…私は他の皆とは違う、薄々感じていましたゆえ…」

此れまで風友が麗蘭に「光龍」の真実を明かしていなかったのは、それが余りに重い「宿」であるがゆえに、幼い麗蘭が受け止められるか否か不安があったからだだった。しかし麗蘭の此の反応を見て、風友は自分の弟子が思ったよりもずっと大人で、自分の力の大きさや特殊性を良く把握しているのだと気付き、改めて感心させられた。

「して、黒龍神と話したのだな？」

「はい。光龍としての宿を捨てるか戦う道に行くか、選べと。」

光龍である麗蘭の最大の使命は、悪である黒龍神を斃すこと。

「それで、どうしたのだ。」

「無論、私は宿を捨てなどしません。」

さほど心配していたわけではないが、風友は肩を撫で下ろす。

「私は何があるかと、自分の宿命から逃げたくありません。私には皆にはない力がある。私はそれで使命を果たしたい。」

麗蘭の瞳は、強かった。風友をじつと見詰めて揺らがない。麗蘭を守ってくれと風友に頼んだ、あの時の聖妃の瞳にとても良く似ていた。

「…言い伝えによると、黒龍神は一五〇〇年もの間封じられていたはず。お前の前に現れたということは…封印が解けたのだな。」
「恐らく。」

神話では、一五〇〇年前黒龍神を斃そうとした時の光龍は彼に敗れ、命を落としたと言われている。

此の先、麗蘭が本当に黒龍神と対峙する時が来るなら、本当に勝てるのだろうか？ 麗蘭を大事に思うがゆえに、それを思うと胸が痛む。

不安な気持ちを胸に抑え、やがて風友は優しく微笑んだ。

「…では此れから、一層腕を磨かねばな。私の手等借りなくても良

い位、お前は強く為る。まずは私を追い越せ。」

そう言って、麗蘭の頭を撫でる。

「…はい！」

ずっと探し求めていた自分の宿命。黒神が示唆したように、その宿の重みに負けそうになる時が来るかもしれない。しかし、麗蘭は力強く応える…逃げない、逃げたくない。そう思えたから。

風友もまた、此の我が娘同然の弟子を、何処までも信じ抜き支えていこうと誓うのだった。

邂逅へ3（後書き）

次回、また動きます。

邂逅へ4（前書き）

麗蘭の妹姫、蘭麗登場。

邂逅〈4〉

風友や麗蘭が都を離れている間、聖安帝国と茗帝国の戦争は激化していた。

甬帝治政下九年の冬。聖安帝国領地の岱銅^{だいどう}にて、麗蘭の父甬帝崩御。戦死であった。

茗軍は聖安の各軍拠点に兵を進め制圧を続けている。残された聖妃は侵略を食い止めるため、夫の死を悼む暇もなく休むことなく動いていた。

そして、追い打ちをかけるように悲劇が起こる。

「陛下！大変でございます！！」

「どうしたのですか？」

聖妃は疲れ切っていた。日に日に痩せ細ってゆき、白磁の肌が益々白くなっている。聖安一の美女と謳われ、褒め称^{そや}されたその美貌は此処数週間の激務のために翳^{かげ}ってしまっていた。

戦況は悪くなる一方で、夫までも亡くした。慈悲深く聡明で優れた皇妃と民にも臣にも慕われた彼女も、体力的にも精神的にも限界が近付いていた。それでも、決して臣には疲労の色を見せようとなない。

「蒼桐宮^{そうどう}に隠れていらっしやった、蘭麗^{らんれい}姫が…」

使者の言葉に聖妃の顔が蒼白になっていく。

「蘭麗が…どうしたのです？」

普段の皇妃らしくない動揺振りに、使者は堪らず目を逸らしてしまふ。

「珠帝の人質となりました…」

「蘭麗が、捕えられた…」

余りの衝撃に思わず、傍にあった長椅子に座りこんでしまった。

——恐れていたことが、現実になってしまった。

皇女蘭麗とは、麗蘭が生まれた一年後に誕生した皇女で、麗蘭の代わりに皇位継承者として育てられていた。

事情を知る者には、麗蘭を隠し通すための囷だ等と批判もされた。それでも聖妃や甬帝にとっては、唯一自らの手の中に残された宝だったのだ。

「珠帝自ら、蒼桐宮を占拠しています…陛下がお出でになるよう要求しています。」

「行きます。馬車を出しなさい。」

聖妃は間髪入れずに命じた。自らを奮い立たせるように、厳しく険しい声色だった。

主の痛みを受け取ったのか、使者は必死に訴えかける。

「…恐れながら、畏です。どうか…」

「解っています。兎に角早くなさい。」

有無を言わせなかった。平生は穏やかで臣下達にも優しげに接する彼女らしからぬ物言いだだったが、今はそれどころではない。

聖妃を乗せた馬車は、蒼桐宮へと一気に駆け抜ける。

蒼桐宮は帝都紫瑤の郊外南に位置する古い城で、蘭麗はそこに隠れていた。既に茗帝国軍は、紫瑤に入り込んで来る程侵略を進めていたのだ。

更に蘭麗の居場所が知られる程、情報が漏れている。不利になる一方の状況に、問題が山積みだった。

しかし今の聖妃には、蘭麗の無事を祈る気持ちしかなかった。

「陛下、聖妃さまがお見えです。」

「…お通ししろ、丁重にな。」

珠玉——長い髪を束ね、真赤な鎧に身を包んだその姿。真赤な瞳には、果てのない野望を秘めている。正に、女傑と呼ばれるに相応しい風貌だ。

珠玉は氏を赤せきといい、茗帝国の名門の生まれで強力な神人でもある。代々将軍を出す家柄の出身で、自身も武の達人である。

皇太子と婚姻して、彼が皇位についてすぐ彼を暗殺。様々な策を用いて遂には自ら女帝となった。

暫らくして、聖妃がやってくる。傍らに護衛を二人付けているだけのようで、敵陣に入って行く君主としてはそれらしくない防備だった。

「よく、お出でになられた。お掛け下さい。」

聖妃は冷静な面持ちで椅子に掛ける。使者から報告を聞き、動揺していたつい先刻とは打って変わっていた。何が有ろうと、珠玉の面前で取り乱すわけにはいかない。

此の二人が会うのは初めてではなかった。確か甬帝が帝位についていた時、まだ戦争が始まっていなかった時、珠玉が聖安に来賓として招かれていたのだ。

「珠帝、貴女は何をお望みですか？」

単刀直入に切り出す聖妃。

「流石は聖妃さま。察しがよろしゅうございますな…皇女を連れて参れ。」

珠玉に命じられ、控えていた兵が蘭麗を連れてきた。

「蘭麗…！」

蘭麗は今年六つになる。茶色の長い髪を下ろし、透き通る水のような色の瞳をした、聖妃に良く似た顔立ちの姫だった。

逃げられないよう二人の兵に挟まれ怯えていてもおかしくない状況の中、毅然とした態度を取っている。

「…良い姫だ。此の姫を、此のまま帰すのは実に惜しくてな。」

珠帝は蘭麗に目をやりくつくつと笑う。そして聖妃に向き直った。

「聖妃さま、此の通り皇女は無事。だが今は我らが捕えた捕虜。此のまま帰すわけにはいかぬ。」

蘭麗は母をずっと見ている。母の出方を見ているようだ。

「そこで…交換条件だ。妾は貴国と和平を結びたい。此の皇女の身柄を預かる代わりに、我が国は今後貴国を攻撃しないと約束する。」

「…」

予想していた範囲内の、条件だった。此れは「和平」ではない。思った以上に戦いが長期化したこともあり、流石の大国茗も此れ以上続けていくのは危険を伴う。そこで一旦戦争を中断させようという魂胆なのだろう。蘭麗を人質に捕れば、侵略せずとも聖安を従わせるには十分過ぎる。

「…身柄を預かるということは、皇女を茗へ連れ行き幽閉するということですか？」

「どう捉えるかは、貴女次第だ。」

聖妃は蘭麗を見る。蘭麗は頭が良く、幼いながらに自分が置かれている立場を良く解している。何も言わず、母に判断を任せようとしていた。

決断を迫られる。娘を宿敵に差し出すか、国を治める者としての責務を果たすべきか。

「どうなされた？ 貴国にとってもそれが最良であろう。」

此処で申し出を断れば、戦争は続く。そして、今のままでは確実に負ける。

暫し沈思した後、聖妃は重い口を開いた。

「和平条約を結び、我が皇女をその証として差し出しましょう。」

その言葉に、珠玉は満足そうに微笑む。

蘭麗は暫らく母の方を見ていたが、やがて何も言わぬまま視線を落とした。一方で聖妃は、珠玉に是という答えを出した後どうしても蘭麗の顔を見ることが出来なかった。

「…聖安は良い皇后陛下をお持ちだ。そうであろう？ 蘭麗。」

こうして、蘭麗は茗帝国の皇宮深くに幽閉され、長年続いてきた戦争は、和平という形で中断されたのだった。

邂逅へ4（後書き）

次回、天界側が動きます。

邂逅〈5〉（前書き）

黒龍と兄上。

邂逅〈5〉

天界――

そこは、人界や魔界の上に位置する、神々の住まう至高の地。中央の天山に、天帝の住まう壮麗な陽凰宮が在った。

「天帝陛下！」

高い高い玉座に、天帝聖龍神が居た。彼は此の世を創造した故君神王の天子で、邪神となった弟黒龍を封じ、天帝を継いだ。

銀系の髪に淡く青い瞳。美しい容貌はその色を除いて黒龍神と同じ。

「黒神をお討ち下さい！ 奴の非道を見過ごすわけには参りません。」

何処からともなく現れた黒神復活の噂は、瞬く間に天界中に広まっていた。神々にとって、黒龍の存在は脅威。一五〇〇年前の“天宮の戮”では、立ちほだかる闘神を次々と血祭りに上げ、あつという間に神王の首級を上げた。

その時の彼は、正しく“魔神”。止められたのは、双子の兄である聖龍神だけだった。

彼が施した封印の神術が解けた今、一五〇〇年前天界の神々を震え上がらせた恐怖が、再び天治界を震撼させようとしている。

「聞けば、あの？ 明神殿も黒龍討伐に赴き帰らないとか。」

「あれから奴の力は更に巨大に為ったと聞き及びます。もし、此の天界にまた現われてもしたら…」

「今度こそ、奴を討たねばなりません。あのような残虐な殺戮を繰り返させる前に…我々は陛下だけが頼りなのです。」

神々は次々に聖龍神に懇願した。それらを聞いていた聖龍は何も言わず、ただ玉座の下の神々を見下ろしているだけである。

ここ数年の間に、何十人かの闘神たちが名乗りを上げ、黒龍討伐に向かっている。しかし帰ってきた者は誰一人としていなかった。一人、また一人と黒龍の下に向う度に神気を消していく…つまりそれは、一人残らず殺され消滅させられたということを意味していた。その度神々の恐怖は増していき、次第に名乗りを上げる者も居なくなっていた。

天界最強の闘神と称された？明神が敗れたとされてからは、誰一人として黒龍の元に向かっていない。

「陛下、何とぞ、再び御自ら奴をお討ちください！どうか…」

ある神がそう言いかけた、その時だった。

「それは無用な心配だ。今からおまえたちは死に逝くのだから。」

その場にいた誰もが聞き覚えのある低い声が、静かに響いた。一瞬にして辺りが静まり返る。そして突然、広間中が白い光に包まれた。

少しして、徐々に光が消えていく。すると、それまでそこに立っていたはずの神々が血を上げて倒れていた。どの死体も四肢を裂かれ、辺りに転がっている…自分が死ぬことにすら気付かなかっただ

ろう。

死体の中心に、彼は居た。玉座の下から聖龍を見上げて、右手に白く輝く剣を持っている。

「…此処に来るのも久しいな。最後に来たのは…神王を弑し奉り、貴方と剣を交えた時か。」

黒龍神は、足元に転がる死体を踏み付けながら階段を上り始めた。

「兄上、お久しゅうございます。『鵠^{めえ}』はたつた今、御元に。」

玉座の兄の元まで来ると、そつとその手に触れる。聖龍神は、何も言わずに弟の目を見ている。

「…一五〇〇年振りにお会いするというのに、此の弟に何の言葉もかけて下さらぬのか。『黒龍』には言葉をかけることすら憚^{はば}られま
すか？」

黒龍は笑んでいる。しかしその目は笑っていない。そして兄から手を放す。

「此の玉座を手に入れられたのも、私のお陰だというのに…闘神を差し向けて、殺そうとさえなされた。無駄だと解つておいででしょうに…何時の間にやら貴方も神王と似てこられたようだ、失望しましたよ。」

言葉とは裏腹に、彼の表情に沈んでいる様子など微塵も無い。

「まあ、たとえ貴方が止めても聞き入れるような連中ではなかった

でしょうからねえ。随分と沢山私の所に来たものだから、何人殺したか覚えていないのですが…貴方の本意では無かったのでしょうか？」

兄の真意や事情など解りきっているというように、嗤っている。

「…お前は、此の玉座が欲しいのか？」

漸く、聖龍は口を開く。険しい面持ちは崩していない。

「ふ…ふ。違うな。私は此の世界等、『天』も『地』も要らぬ。」

その笑みは、凍り付く様に静かで美しい笑み。

「私が欲するのは、血の賛美と生ける者の慟哭。」

黒龍神は、兄の足元に手にしていた剣を立てる。それは、黒龍を封じ込めていた兄の剣『瑞装』。

「私は、神王と貴方が創り上げて来た此の世界が滅びゆく様を見た。い。」

聖龍が立ち上がる。剣を取り、その切っ先を真つ直ぐ弟に向ける。

「お前がそれを望むというなら、私は再び、お前を止めねばならない。」

黒龍神はそれを見て、一層嘲笑った。

「兄上、私を見縊るな。貴方の神力が弱まり、新たな光龍が生まれても人界に降りられなかったことは分かっている…現に、先刻の奴

等のように…怯える憐れな神々の嘆願を聞き入れ、自ら私を討ちに来ることも出来なかったのでしょうか？一方、私の力は封じられている間にも増し続けた…今闘えば、私は貴方を確実に殺せる。」

彼の言うことは真実だった。自分よりも神力の強い黒龍を封じ込め、長い長い間抑え込んでいたために、聖龍の力は以前と比べて甚だしく衰えている。

「私は悟ったのです。私の甘さが…私の弱さが、私に全てを失わせた。再び手にした此の力で、もう二度と…何も奪わせはしない。だから、今の私は誰でも殺せる…」

聖龍は剣を下ろした。

「『黒龍』、ウラハカミ耀蕎を殺したのは…お前だな？」

天宮の戮で唯一生き残った、五大闘神最強の？明神耀蕎。彼女は自ら黒龍討伐に志願し、聖龍がそれを許した。しかし彼女は戻って来なかった。そして彼女の神気が消え去ったことが、彼女が消滅した事実を示していた。

「…私は一五〇〇年前、あの奈雷ですら殺したのです。驚くことでもないでしょう？」

大したことはない、何ということでもない、そんな口振り。聖龍は唇を噛む。

「…お珍しい、怒っておられるのですか？そんなに耀蕎が大切なら、何故無理にでもお止めにならなかったのです？私が彼女だからといって見逃すとお思いだったのなら…大きな過ちというものです。」

黒龍の言葉に聖龍は首を横に振った。

「…違う。私には解っていた。お前が彼女を殺すであろうと…にも関わらず彼女を行かせた。彼女を死なせたのは、私の罪だ。」

再び、弟を見据える。

「そして…お前をそんなお前にしてしまったのも…な。」

暫し、二人の間に沈黙が流れる。聖龍は黒龍から目を逸らさず、黒龍は言葉を発しないまま、相変わらず笑んでいる。

やがて黒龍は、玉座の右側に少し離れた所にある台座に目をやる。

「…“淵霧”^{えんぷ}か。やはり貴方が持っていて下さったんですね、兄上。」

兄から離れ、黒龍は黒い神剣の下へとゆっくり歩いていく。彼がその剣に手を掛け強く握ると、呼応するように柄から刃、切っ先まで黒い電撃が走った。

そのまま剣を台座から引き抜くと、黒く滑らかな刀身を顔の側に持ってゆき、見詰める。

「神王に頂いた大切な剣…懐かしい、一五〇〇年前の血の香りと神々の慟哭が甦って来るかのようだ。」

黒龍は呟くように言つと剣を下ろし、再び兄の方を向く。

「今日は兄上へのご挨拶と、此の剣を還してもらいに来たのですよ。貴方と戦うつもりは無い。」

彼は踵を返し、階段を下りていく。そしてふと、思い出したように立ち止って玉座の方を振り返る。

「…麗蘭。新たな光龍は…確かそういいましたね。成長すれば、さぞや美しい女帝となりましょう。」

「…何を企んでいる？」

「…笑止。私の願いは昔と変わらぬ…兄上も…ご存じのはずだ。」

そう言って、再び闇に消えていく。あとに残るは、黒龍が作り出した死の静寂と瑞装のみ。

聖龍は大きく息をついた。そして、既に意味を成さなくなった懐かしい名前を口に出す。

「鵠…」

邂逅へ5（後書き）

作者的には気に入っているシーンです。

光陰へ1（前書き）

運命の出会い。

光陰へ1

あれから、五年。麗蘭が自らの「宿」に目覚めてから、早くも歳月が流れた。

山の「外」では様々なことが変わりつつあったが、麗蘭は外界と隔絶された山奥で日々、ただただ剣と弓の腕を磨く毎日を送っている。

「麗蘭、秦鷹^{しんよう}、お前たちの隣の部屋を、昼までに使えるようにしておきなさい。」

「はい、風友さま。」

秦鷹は応え、麗蘭も頷く。二人は去年から同じ部屋を使っている。

「新しい子が来るのね。どんな子かなあ？…まあ、あんたには関係ないでしょうけど？」

秦鷹は嘲るように言い、主室を出て行く。

麗蘭は今年で十二歳、秦鷹は十四歳で、秦鷹は何かにつけて麗蘭に突っかった。

秦鷹が言い付けを自分一人に押し付けた事を悟り、麗蘭は溜め息をついて隣の部屋を一人で片付け始めた。こうしたことは、珍しいことではない。

孤校の授業が終わってからは一人で剣や弓の稽古をしたり、書物を読み漁ったりするのが麗蘭の日課だった。

子供らしい時期を迎えている今でさえ、彼女には友と呼べる人が一人もいなかった。

親が見つかった者、仕事を見つけた者は次々に孤校を出ていく。多くの子供は将来の夢や希望を持ち励んでいるし、時折親のいない寂しさに涙する者もいた。

しかし、麗蘭は親がいないことを悲しんだことも嘆いたこともない。自分は光龍で、その時が来れば邪悪と闘わなければならない宿があるし、思い出す親の顔を知らないのだ。

彼女の両親は彼女が生まれた頃、山賊に襲われて亡くなったと聞かされている。

一通りすつきり片付くと、再び息を吐く。やっと仕事を終え、漸く読みかけの本の続きに取り掛かれる。

自分の部屋に戻り、畳の上に腰を下ろした。

「…」

彼女は目を覚ました。まだ昼間だというのに、書を読みながらうつとうとしてしまったらしい。立ち上がって、時計を目で探す。

「正午…そうか、朝が早かったからな。」

何やら、主室のほう騒がしい。「新しい子」がやって来たのだろうか。

顔を見せに行かねばならぬと、立ち上がって部屋を出ようとする。すると突然視界が揺れ、身体がぐらつきよろめいてしまう。床に足を付き、壁に片手をやり身体を支える。

「何だ？此の感じは…」

不可思議な、冷氣。只の邪気ではない。身体が全身で拒否するかのような、嫌な感じを覚える。

…それは何処か恐怖さえ感じさせた。

少しして徐々にその感覚にも慣れ、覚束ない足取りながらも何とか主室に入った。そこには風友と何人かの子供と、見知らぬ少女がいた。

見た所麗蘭が感じたような気配には、彼女以外の誰も…風友すらも気付いていない様子だ。

「麗蘭、こちらへ来なさい。」

「はい。」

呼び掛けに応じ、皆の方に歩み寄る。何時の間にか、嫌な気配は消え失せていた。

「此の子が新しく来た瑠璃だ…瑠璃、此の子はお前と同室になる麗蘭。分からないことは何でも聞きなさい。」

風友の言葉の意味が掴めぬ麗蘭が首を傾げた。

「風友さま？」

わからない顔をしている彼女に、風友が声を落として耳打ちする。

「…秦鷹の部屋を移す…折り合いが悪いのだろうか？」

麗蘭は小さく微笑んだ。

瑠璃は美しい娘だった。瞳は麗蘭と同じ珍しい深紫で、おそらく神人なのだろう。黒く艶やかな長い髪で、歳は麗蘭より二つか三つ上、というところだった。

麗蘭に部屋を案内され、瑠璃は年頃の娘にしては少ない荷物を畳の上に置いた。

「運ぶの手伝おうか？」

秦鷹の荷物を外に出すことにされてしまった麗蘭を見て、彼女はすまなそうに問い掛ける。

「いいや、私がやらないと秦鷹に文句をつけられるから。」

麗蘭は短く応える。心にも無く無愛想な言い方になってしまった。しかし、正直彼女は戸惑っていたのだ。同じ年頃の娘がこうして親しそくに話しかけてくることは余りなかったから。

「…麗蘭は、いつから此処にお世話になっているの？」

瑠璃は自分の荷を紐解きながら尋ねた。

「私は、生まれた時から。」

「…ご両親は？」

「私が生まれた頃、賊に襲われ亡くなったそうだ。」

「そうなの…」

「瑠璃は？」

話を途切れさせないよう反射的に、聞いていた。瑠璃とずっと長く会話していたかったのかもしれない。

「私は…良く解らないの。」

「え？」

聞き返した麗蘭に、瑠璃は手を止めた。顔は下を向いたままだ。

「実の両親は四年位前に、私が畑から帰ったら血を流して死んでいた。」

「…」

「その後私を引き取ったのは遠縁にあたる農家の夫婦で、その人たちも、妖怪に襲われて死んだ。」

瑠璃は微かに笑う。それは、器用に悲しみを押し隠し作り出した笑顔。

「変だよ、私の周りって不幸なことばかり起こるの。みんな気味悪がって近付こうともしない…そんな私を拾って下さったのが、風友さま。」

此の時麗蘭は、瑠璃に何処か自分と似たようなものを感じ取った。自分の特別な存在ゆえに、周囲に受け入れてもらえない苦い思いは、麗蘭も良く知っている。

「…あ、ごめんね。初めて会ったばかりなのにこんな暗い話…」
「…構わない。」

秦鷹の荷を全て片付けた麗蘭は、瑠璃の傍に腰を下ろす。

「…荷物を片付けるの、手伝うよ。」

照れくさそうに言う麗蘭に、瑠璃は顔を綻ばせて喜ぶ。

「ありがとう、麗蘭。」

…二人は此の日、友になった。

光陰へ1（後書き）

瑠璃は作者の最良キャラです。

光陰へ2 (前書き)

凄い女の子たちの戦い。

光陰へ2

実際に孤校での暮らしが始まってみると、瑠璃は面倒見が良く明るく、子供たちに好かれた。

武芸や学問にも秀で、天が与えた才は光龍である麗蘭にも引けを取らない程。風友も驚く程であった。此処に来る前にいくつか別の孤校を^{たらいまわ}盪回しにされたらしく、そこで身に付けたとのことだ。

始め、麗蘭は自分と良く似た姉ができたと素直に喜んでいたが、そんな瑠璃に何時の間にか、嫉妬するようになっていた。

自分と同じような力を持ちながら、彼女が自分とは違い、周囲に受け入れられるのを見ていて羨ましく妬ましかった。

瑠璃が孤校にやって来て、早くも三カ月が経とうとしていた。

二人はある日、授業の後二人で弓の稽古をしていた。
木に釘で打ち付けた簡易な的に、交代で矢を射ていく。

「麗蘭？」

額の汗を拭い、隣の麗蘭に話し掛ける。

「どうしたの？今日は調子悪いの？」

瑠璃が心配していたのは、麗蘭がらしくもなく、何度も的を大きく外しているからだった。麗蘭が的を外すことなど滅多に無いというのに。

「いや…何でもない。」

心なしか突き放すような言い方になってしまったかもしれないと、麗蘭は口に出してから後悔した。

「麗蘭…何か私、悪いことした？」

不安そうに尋ねてくる瑠璃。

「いや、そんなことは…」

——本当に、何をやっているんだろう自分は。瑠璃は何も悪くないのに。

「最近、私のこと…避けてる気がして。」

「…そんなつもりは、ない。気分を悪くさせたのなら謝る。」

「…そうじゃなくて！」

少し強く言った瑠璃は、麗蘭の方に向き直る。

「何かあるなら、ちゃんと行ってほしい。私たち、友達でしょ？」
「…」

そう、麗蘭にとって初めての友達。同じ部屋になって、色んなことを少しずつ話していくうちに、毎日が楽しくなっていたはずだ。それなのにいつから、こんな気持ちを抱き始めてしまったのだろ

う。

「…済まない。」

それきり黙ってしまった麗蘭に、瑠璃は溜め息をついた。

「…ううん、いいよ。私こそごめん。麗蘭は優しいから…素直になれないことも、あるよね。」

——私が、優しい？そんなはずはない。

今だってこうして瑠璃に対し、みつともない嫉妬心を抱いている。

「…そろそろ帰ろうか。私たち、夕餉の支度の当番だったよね？」

瑠璃はいつものように、花のように微笑んだ。麗蘭は済まなそうに頷くことしか出来なかった。

麗蘭はこの三カ月、自分の気持ちへの対処に困っていた。
誰かを妬ましいと思ったり、避けたいと思ったり、そんな部分が自分の心の中にあつたのだと思うと、自分自身が嫌でたまらなくなる。

弓矢をしまい、瑠璃とともに歩き出そうとしたその時。

「…妖気だ…」

はつきりと、感じた。

…近い。

「かなり大きいね。…それも沢山いる。」

麗蘭は刀を抜いた。五年前のあの日以来、風友の指示もあって、森に入るときはいつも刀を持っていた。

瑠璃も再び弓を握る。

強い風が起こり、森がざわめく。つい先程までは穏やかだった空が急に荒れ始めている。

「…逃げる瑠璃。私が引き付けるから。」

「え…？何を言ってるの？」

確信めいたものがあつた。

「…あいつらは、きっと私を狙っている。」

「…麗蘭？どういうことな…」

瑠璃が言い終わらないうちに、麗蘭が走りだした。

——妖共は、私を狙っているに違いない。

こんなに大きな邪気を感じたのは、五年前のあの時以来だ。

麗蘭たちが住んでいる阿宋山にも、妖怪は出るし、人を襲う。しかし、あの時の廳靈のような強大な妖怪は人界には出ない。麗蘭も此の五年間、あれ程のものを目にする事はなかった。

…そして今、再び巨大な妖気を感じている。

——今度こそ…負けはせぬ。

あの時麗蘭はまだ幼く、危ない所で風友に助けてもらった。しかしあれから五年、剣も弓も、毎日修行を続けた。

——倒してみせる。…私の手で。

自分の力を試したい。一心に、走り抜けた。

…目の前に広がるのは、麝鳥じゃちょうの群れ。廳靈と同じく人界には出ない大型の鳥の妖怪だ。何十羽もが木々に止まり、まるで麗蘭を待ち受けているかのようだった。

麗蘭が刀を抜き構えると、不気味な啼き声を上げて飛び上がる。やがて狙いを定めると、彼女目掛けて一斉に襲い掛かってきた。

呪を唱えて刀に神力を籠める。妖を滅ぼす退魔の呪だ。刀を大きく振り、切り倒していく。

振っては切り、薙ぎ払う。隙を見て呪を唱え、一気に吹き飛ばす。倒しても倒しても、次が出てくる。

——切りがない…此のままでは…

振り被り、大きく薙ぐ。

呪のお陰で、刀に麝鳥の血はこびり付かない。しかし返り血を浴び、麗蘭は不浄の血で汚れていく。

妖怪の血は、聖なる神人には悪影響を与える。特別に神力の強い麗蘭にとっては尚更だ。

徐々に、自分の神力が弱まっているのが分かる。穢れて神力が弱まると、呪を使えなくなるどころか命の危険にもなりかねない。

一体何処からこんなに現れているのだろうか？切っても切っても麝鳥が途切れる気配がない。

「麗蘭！！」

自分を呼ぶ声がした…瑠璃だ。

瑠璃は弓矢で加勢する。彼女も弓に呪をかけているのだろう、麗蘭の間のけいの外に止まっている麝鳥の目を、正確に射抜き一撃で倒している。

「瑠璃…」

「そんなに血を浴びてたら、長く保たないよ…風友さまには伝えて来たから孤校は大丈夫。一緒に戦おう。」

麗蘭ははっとした。自分は麝鳥を倒すことしか考えていなかったのに、瑠璃は孤校の子供たちを案じ、逃げるよう伝えることを優先したのだ。

「…私はまだまだ…だな。」

瑠璃が来たことで少し安心したのか、麗蘭の力が一瞬、抜ける。

「危ない！麗蘭！！」

瑠璃が叫ぶ。血の穢れによって勘が鈍り、背後の麝鳥に気付かなかったのだ。

「くっ…！」

麗蘭はとつさに刀で爪の攻撃を抑えると、攻撃の呪を唱える。麝鳥は吹き飛んだが、体勢を崩し、地に足を付けてしまう。

…身体がよろめく。限界だった。

「麗蘭！」

瑠璃は麗蘭の元へ走っていき、倒れる麗蘭を支えると、呪を唱えて麝鳥の攻撃を防ぐ。その時防ぎきれなかった麝鳥の爪が、瑠璃の左肩を斬り裂いた。

「うっ…！」

「瑠璃っ…！」

痛みに耐え体勢を立て直すと、瑠璃は麗蘭を支えたまま呪を唱える。辺りが白い光で包まれていく――

光陰へ2（後書き）

麗蘭の瑠璃への気持ち。

色々神がかったている麗蘭にも、普通の少女らしい一面があります。

光陰へ3（前書き）

あの人が出ます。

光陰〈3〉

「…はあ、はあ。此処まで来れば、大丈夫ね。」

麗蘭は、目を閉じて気の流れに感覚を研ぎ澄ます。

「麝鳥の気配が…消えた？」

あれ程まで強く感じていた邪気が、跡形もなく消えている。

「瑠璃、先程の呪は…」

「え？大したことない、只の目晦ましだよ。」

瑠璃は呼吸を整えながら応える。彼女が放った光で時間を稼ぎ、二人は此処まで逃げて来たのだ。

麗蘭が瑠璃を見ると、麝鳥の爪でやられた傷から血が出ているのに気付く。

「傷の手当てをしないと…」

かなり深く、ぱっくりと切れているようだ。とりあえず流れ出る血を止めようと、瑠璃の左肩に触れようとする。

「…触らないで！」

突然、麗蘭が聞いたことも無いような鋭い声を出し、瑠璃は強く拒否をした。

「…瑠璃？」

目を見開いている麗蘭に気付き、首を横に振って無理にいつものように笑もうとする。

「…あ、ああ。ごめんね、何でもない。傷は大丈夫、ちゃんと止血して…」

「瑠璃。」

初めて瑠璃が孤校に来た時から、ずっと不思議に思っていたことがあった。

あの日、瑠璃がやって来た時、麗蘭は何とも言えない嫌な気を感じて動けなくなったことがあった。そして今日まで、瑠璃と過ごしてきた、同じようなことが何度かあった。麗蘭がその気配を感じていることを瑠璃は気付いていなかったし、麗蘭の方も何ともない振りをしていた。

「先程、お前は弓を使っていたから返り血をほとんど浴びていない。しかし私が流した麝鳥の血で、あそこは瘡気に満ちていたはずだ。」

瑠璃は反応に困ったような顔をして聞いている。

「それなのに、どうしてお前は何の影響も受けていない？…最後のあの呪は、目晦ましではないだろう。あれで一気に、麝鳥どもを全滅させたのだろう？ 影響を受けていないから、あんな大きな呪が撃てた。」

その証拠に、今は何の邪気も感じられない。

「麗蘭、私は…」

そして、先程の瑠璃の反応で、予想が確信に近づいたのだ。

「何より…お前からは奴の気配を感じるのだ…黒龍神の気を。」

そこまで言い終わると、暫らくの間沈黙が流れる。俯いていた瑠璃は、顔を上げた。

「…成程、私がお前の様子を探っていたように、お前も私の正体を探っていたのだな。」

ついさっきまでの、「友であった」瑠璃は、消えていた。声までも、別人のように冷たく低い。

「…！」

麗蘭が呆気にとられているうちに、彼女が手にしていた刀を奪う。そのまま素早く切っ先が向けられ、麗蘭の頬を掠めて血が薄らと滲み出る。

「お前の察した通り、私は黒龍神さまの僕。」

躊躇い無く言い放つ。

「聡いお前のことだ、私の正体にも感づいているのだろう?」

そう言うと、傷ついた左肩の着物を剥ぎ取る。

「黒龍の…印。」

切り傷の下に、麗蘭のものと色が違う…黒い印が刻まれていた。それは、もう一人の神巫女の証。黒龍神の僕“闇龍”の証――

同じ神巫女でも、光龍である麗蘭とは身に湛えた神力の性質が違う。聖なる力を纏う麗蘭と、黒い力を纏う瑠璃。瑠璃が妖怪の血の穢れにびくともしなかったのは、そのためだったのだ。

「今のお前は血で穢れ、神力を削がれている…殺すには絶好の好機だ。」

瑠璃が敵ではないかと疑っていた麗蘭だが、心の底では信じたくなかった。「殺す」という言葉に、胸が締め付けられる程痛む。

「『あの方』は私に命じられた、お前を殺せと。そして私は、お前の力や様子を窺っていたのだ。」

瑠璃を羨ましく思う、嫉妬心。麗蘭が瑠璃にだんだん距離を置いたのは、あの嫉妬だけではなく、彼女を疑う不信感も原因だった。

それでも信じたかった。初めて会った、尊敬出来る友を。短いながらも楽しかった日々が偽りだとしても。

「私は死ねない…死ぬわけにはいかない。」

麗蘭は顔を上げ、真っ直ぐに瑠璃を見る。強い瞳で、全てを振り切り自分を奮い起すかのように言葉を発していた。

光龍として、闇を討つ。それなのに、まだ何も為していない。

「…諦める。私は此処で、お前を殺す…そのために態々孤校に入り込み、麝鳥を此処へ誘き寄せたのだからな。」

瑠璃は麗蘭の刀を構える。彼女の瞳にもまた、迷いの色は無い。

それに応えるように麗蘭も立ち上がり、背負っていた弓を握り締める。

戦いは見えていた。刀を持つ瑠璃に敵うはずがない。それに呪を唱えたとしても結果は同じ。麝鳥を一瞬で消し去ったあの力…恐らく、神力は瑠璃のほうが遥かに強い。麗蘭の神力が弱まった今の状況なら尚更だった。

しかし、麗蘭の眼差しは強い。如何に不利でも、決して背を向けたくないし、どの道逃げ場はない。

「瑠璃、一つ答える。」

闘う前に、彼女と本当に決別する前に、どうしても確かめておきたいことがあった。同じ宿を背負った者として、相容れない敵同士の立場にある者として。

「お前は今までのこと、全てをお前の意思でやってきたのか？お前自身が、奴に従うと決めたのか？」

「私は私の意思で、あの方に従っている。あの方に従う自分の“宿”を選んだ。」

彼女の答えに麗蘭は安心した。それならば、自分と同じ。従うこ

とを自ら選びとったのだ。

——お前も“宿”を背負っているのなら、
私も全力で向かう。たとえお前が相手でも私は…負けない！

瑠璃は刀を振り被る。麗蘭は残った力を絞り出し、それを避ける。
何とかかわしたが、体勢を崩し地に膝を付いてしまう。瑠璃の容
赦ない二撃目が直ぐに来る。

——やはり、速い…避けきれぬか…！？

その時だった。

「…なに…？」

瑠璃の刀を下ろす手が、麗蘭の頭上で止まっている。

「動かぬ…」

手の動きを封じられているようだった。麗蘭も瑠璃も、それぞれ
突然のことに驚愕している。

「…？」

すると、背後から声がする。

「麗蘭。」

その声が響くと共に明らかに、辺りの気が変わったのが分かる。

空気が澄み渡り、森が静まり返っている…何処かで聞き覚えがある声だった。

振り向くと、少し離れた場所に男が立っている。

「黒…龍？ いや違う…」

忘れもしない、五年前に見た黒龍神と同じ顔。しかし、彼ではない。銀色の髪に、淡い色の瞳をして、その身に纏うのは聖なる神気。

「まさか、お前は…」

男の姿を確認すると、瑠璃の顔色が変わる。明らかに驚いているようで、動揺を隠せていない。術が解け動けるようになると、刀を捨てて麗蘭から離れる。

「瑠璃…？」

「…また会おう、麗蘭。次は必ず決着をつける。」

そう言って、彼女は立ち去ってしまった。何処かその場から逃れるが如く、消えるように。

後に残ったのは、麗蘭と男一人。男は静かに麗蘭を見下ろしていた。

光陰へ3（後書き）

瑠璃の態度が変わり過ぎですね。

光陰へ4（前書き）

兄上登場。

光陰へ4

かつて、“光龍”を創造し人界に遣わしたのは、魔神黒龍神の双子の兄であり、此の世の全てを統べる神々の王、天帝聖龍神。

千五百年前、黒龍神を人界に封印し此の世界を救い、今は天界の頂点に君臨する彼こそが、光龍麗蘭が仕えるべき主。

「…貴方は、天帝陛下…なのですか？」

無論会つのはこれが初めてだが、何故だか彼女にはそうだと分かる。

麗蘭は立ち上がると低頭する。それは、彼女には至極自然なことに感じられた。

「面を…上げよ。」

何時の間にか、聖龍は麗蘭の直ぐ傍まで来ていた。先程瑠璃に付けられた頬の傷に、細い指先で優しく触れる。傷は一瞬で消えてしまった。

——何て…澄んだ瞳…黒龍とはまた、何処かが違う。

「五年前…黒龍がそなたのもとに現れた時、そなたは宿を選ぶと言った。」

「…はい。」

「そして先程も瑠璃と対峙して、闘うと誓った…そうだな？」

「はい、その通りです。」

聖龍は深く頷く。

「光龍としてのそなたの使命は、黒龍神が復活した今、奴を斃すこと。そして、闇龍である瑠璃を斃すこと。」

「…はい。」

抑揚のない淡々とした話し方で、彼は続ける。

「私と黒龍の命には、理が存在する。私を殺せるのは、黒龍と闇龍だけ。一方で黒龍を殺せるのは、此の世にそなたと私しかないのだ。」

「私と、陛下だけ…？」

“理”という言葉は、麗蘭も聞き覚えがあった。宿よりもさらに強い、決して抗うことの出来ない自然の摂理のようなものだという。

「私は一五〇〇年前、黒龍を殺そうとしたが…出来なかった。私と奴にある“絆”が、私の力を弱めたのだ。」

「絆？」

——聖龍と黒龍は双神。

そのことが関係しているのだろうか？

「同様に、あの時奴も私を殺すことが出来なかった。しかし封印から解き放たれ、奴の邪悪な力が増し絆が消えかった今なら、奴は私を殺せるかもしれぬ。」

聖龍は麗蘭から目を逸らし、視線を落とす。

「我々は奴を斃さねばならない。奴は此の世を滅ぼす宿を受け入れた神。復活した以上、それを為そうとするだろう。」

人間だけでなく神々も、宿を持っているというのだろうか。

「私の力は、日に日に衰えている…此れも、神にさえ抗うことのない理の一。もつと早くそなたに会いに来たかったが、玉座を離れることも叶わぬ程…もはや、奴に闘いを挑むことすら出来ぬ。天を守る者として、神力を此れ以上弱らせるわけにはいかぬのだ。反対に、奴の力は高まりつつある。」

「…ならば、黒神を斃せるのは…私だけということになるのですか？」

麗蘭の問いに、聖龍が首肯した。

「理によれば、そなたにも黒龍を斃すことが可能なはず…開光すれば、必ず勝機が見える。」

「開光？」

聞いたことのない言葉だった。

「そなたは光龍。しかし、まだ真の光龍ではない。そなたにはまだ、目覚めていない力が眠っているのだ。闇龍の場合、それを開闇という。先程そなたが瑠璃に気圧されていたのは、瑠璃が既に開闇していたからだ。」

「開光すれば、瑠璃と互角の神力を得られるのですね？」

「そうだ。」

「どうすれば、開光出来るのですか？」

力を手に入れるために、開光というものが必要なら……しかも瑠璃の方は既に為しているというのなら、自分も急がねばならない。

「方法は、そなたが試練を乗り越えることだ。それはいつ訪れるかわからない。どんなものかもそなた次第で変わる。瑠璃は、それが早かったのだ。」

瑠璃は、麗蘭を圧倒する神力を身に付けていた。恐らく今のままでは負けてしまう。それは次に会う時まで、開光を成し遂げなければならぬということの意味していた。

「…私は、強くなりたい。宿を果たすためにも、自分自身のためにも。」

「では……」

聖龍は、一歩ずつ後ろに退いて行く。

「そなたの為すべきことを為せ。そなたには、それが出来る。」

「…はい！」

為すべきこと。

——それはきつと、今の自分には此処で修行に励み、剣や弓の腕を上げること。そしてそれだけでなく、心も強くなること。

麗蘭の強い瞳を見て、聖龍神は初めて微笑んだ。それは柔らかな、温かい表情。

「いずれまた、会おう。」

そう言い残して、天帝は光に消えていく——

麗蘭は、改めて決意した。“宿”のため、そして自分のために闘い続けて行くことを。

光陰へ4（後書き）

麗蘭素直ですね…

光陰へ5（前書き）

とても短いですが、三章ラスト。

光陰へ5

「漸く…兄上が降りて来られたか。麗蘭の命の危機を感じて…力が弱まり天の玉座を離れられないといえど、麗蘭の命は余程大切と見える。」

黒龍は、戻って来た瑠璃の傷を治してやる。

「…元より今回は、麗蘭の命を取ることでなく、天帝連れ出すことが目的だったのでしょう？」

薄々は感じていたが、主の言動からそう確信する。

瑠璃は麗蘭を殺せなかった。流石に、今の瑠璃では聖龍を相手に出来るとは思えないからだ。それでも、黒龍は瑠璃をこうして労いとともに応えた。

「…兄上と会うことで麗蘭は一層自分の使命を自覚しただろう…彼女には早く開光してもらわねば。」

主である黒龍に、瑠璃は幼い頃から従って来た。しかしこうして彼の近くにいる瑠璃にさえ、彼の考えていることが何なのか完全には分からない。

今もまた、敵である麗蘭を開光させようという彼の真の意図が分からない。

いずれにせよ、瑠璃が果たすべきことは、此の主に従うことだ。

…それが彼女の全てだった。

希望へ1（前書き）

最終章です。

希望へ1

麗蘭の瑠璃との出会いと決別から、二年後。

先の茗帝国との和平条約により侵略を一時免れた聖安帝国だったが、定期的に茗に送る使節が殺されたとの報が入り、珠玉が和平を破り戦争を再開するとの噂が流れていた。

甬帝崩御の後、代わって帝位についた聖妃は、今は恵帝と呼ばれている。

来るべき開戦に備え、休む間もなく動きながらも、手元から離れた二人の娘を想う。そんな日々を送っていた。

「お久し振りで、風友。」

十四年振りに皇宮燈鳳宮を訪ねて来た風友に、恵帝が懐かしそうに微笑む。

「お久振りでございます…遅ればせながら、甬帝陛下ご崩御、お悔やみ申し上げます。そして、女帝と為られた貴女様に、心からの祝福を。」

十四年間、帝都から離れていた風友だったが、恵帝や昔馴染みの文のやり取りなどで常に国情を掴んでいた。古くからの皇室の忠臣として、離れていても主の身を常に案じていたのだ。

「ありがとうございます…それで…あの子はどうしていますか？文では健やかであると聞いていますが…」

文で触れることもあったが、麗蘭の存在は重大な秘密。他に漏れ出ることを警戒し、余り詳しく書くわけにはいかなかった。

「貴女様に似て強く、輝かしいばかりに美しくおなりました。」

学問と武芸の才については昔からだが、此处数年で、精神しんしんの面でも大きく成長している。

黒龍や聖龍、そして闇龍であった瑠璃との決別など、麗蘭から伝え聞いたことも交えて、風友は恵帝に話して聞かせた。

「そうですか…」

自分の娘が手の届かぬところで、命の危険に曝されるようなことも何度か経験している。それでも彼女の顔は何処か安心したような、満足したようなものだった。

「それで…いつ頃皇女として、こちらに戻すおつもりですか？」

「…麗蘭を人質に取られ、再び開戦を迎えようとしている今、麗蘭は我が国の希望…あと二年。あと二年で、麗蘭には戻って欲しい。」

「二年…ですか。」

「はい…あの子の一六歳の誕生日、真実を告げようと思います。それまでもう暫らく、あの子をお願いします。」

「…畏まりました。」

風友は深く、頭を下げた。

風友は皇宮を後にする。町並みを見れば、戦乱のただ中であつた一四年前よりは、本来の賑わいを取り戻している。

しかし人々は、開戦の噂で言い知れぬ不安を抱えているように見受けられた。

此の先、此の国は一体どのような運命を辿ることになるのだろうか？

希望へ2

「ただいま。」

「お帰りなさい、風友さま。」

孤校に戻った風友は、幼い子供たちに囲まれほっと一息をつく。そして荷物を下ろすと、思い出したように一人の少女を探した。

「優花、優花は何処だ？」

「はい、此処にあります。」

夕餉の支度をしていた優花が、風友の前に現れた。

「風友さま、お帰りなさいませ。」

「ただいま。留守番ご苦労だったね。」

優花は今年麗蘭と同じ一四歳になる少女で、肩より少し長めの紺色の髪で、瞳は暗めの金。つい一週間程前に此の孤校にやって来たばかりだった。

「明日、峨^{がゆう}邑へ行っている麗蘭が帰って来る。麗蘭に会うのは初めてだろう？ 麓まで迎えに行ってみないか？」

「麗蘭って、妖怪退治に行ってるって言う…？」

「ああ。明日の正午には着くみたいだから。」

「はい、わかりました!」

彼女は快く了解した。

優花にこんなことを持ちかけた風友には、ある考えがあったのだ。

翌朝、山を降りた優花は、麗蘭を待ったため麓の村へと向かった。

「麗蘭か…どんな子なんだろう。皆に聞いたところによると、ちょっと変わった子みたいだけど…」

麗蘭は、他の子供とは余り仲が良くないらしい。というより、優花の持った印象では、学問でも武芸でも優れた麗蘭に皆が嫉妬しているというような感じだった。

今回の妖怪退治にしても、その少女離れた武術の腕を買われてのことらしい。時折少し遠い町や村まで、妖怪を倒しに行くそうだ。

…近頃、妖怪が増えているように思う。

風友が迎えに行くのを優花に頼んだのも、まず一つの理由に、麗

蘭以外に優花しか一人で山を降りられないから、というものがあるのだろう。

「私と同一年で妖怪退治で評判になるなんて、なんか…こう、凄く大きい体つきとか、怖い顔をしているとか…なのかな？」

勝手な想像を膨らませながら、何時の間にか目的地に着いていた。

「風友さまは此処で待つてれば良いって言つてたつけ。」

山道へと続く道沿いの、村の入り口。暫らくそこで待つていたが、一向に現れる気配がない。

「…うん。もうそろそろ正午なんだけどなあ。」

道行く人に、麗蘭の特徴を言つて見ていないか聞いてみた。すると、此の村の人は彼女のことを知っている人が多かった。

「ああ、そりゃあ麗蘭だね。また妖怪退治に行っているのか、大変だねえ。」

「麗蘭？いや、見ていないね。朝から此処にいるけど、まだ通っていないんじゃないかな。」

そうしているうちに、優花に一人の少年が話しかけた。優花よりも少し年上位だろうか。

「誰か待ち人？」

「ええ、私と同じ位の女の子。髪が長くて太陽色で…」

少年は微笑み、大きく頷く。

「ああ、その娘ならお堂の前にいたぜ。」

「ほんと！？じゃあ行ってみようかな。」

「よし、おれが連れて行ってやるよ。」

彼女は安心し、人の良さそうな此の少年に付いて行くことにした。

優花が少年に付いて行った少し後、入れ違うように麗蘭がやって来た。

「麗蘭、また妖怪退治に行ってたんだって？」

「はい、峨邑まで。」

以前よりも頻繁に阿宋山を出るようになり、彼女が少し苦手だと感じていた「人と話す」ということも、普通に出来るようになりつつあった。

「さっきまであんたを待っていた女の子がいてね、風友さまのお使いとかで…」

「え？…それで、今何処に？」

「それがね、さっき見かけない男の子に付いて行ってしまったんだよ。」

「見かけない男の子…？」

麗蘭は何となく、不安になってきた。

「あっちの方へ行つたよ。たぶんお堂の方じゃないかねえ。」

「…ありがとうございます。行ってみます。」

教えてくれたおばさんに礼を言つと、足早に歩き出した。

希望へ3 (前書き)

男前な麗蘭。

希望〈3〉

優花は少年に連れられて、村の奥のお堂までやって来た。歩いて
いるうちに、何か変だと気付き始めながら。

「ねえ、本当にこんなところにいるの？」

「…」

「ねえってば！」

応えない少年に優花は声を荒げる。すると突然、少年は大声で叫
んだ。

「連れて来たぞー！」

「？」

少年の呼びかけで、お堂の中から六、七人の若い男が出てくる。
いかにも不良、といった感じの輩たちだ。

「おじょうちゃん、知らない子には付いて行っちゃいけないって、
お母ちゃんに教わらなかったか？」

「…何、あんたたち…」

「なかなか可愛いねえ、売り飛ばせば金になりそうだ。」

「売り飛ばす？」

話には聞いていたが、本当にいるとは知らなかった。人買いは、身寄りのない子供や攫ってきた子供を他所の国の行商人に売り飛ばしてしまふそうだ。

——あー、面倒くさいなあ、もう。

どうしようかな…逃げるのは簡単だけど…

「さあ、付いて来てもらおうか。」

「ちょっと何すんの！ 私は人を探して…」

優花が男の手を振り払おうとしたその時だった。

「手を放せ。」

背後から聞こえたその声に、その場の全員が振り返る。

「貴女は…？」

立っていたのは、太陽色の長い髪に深紫の瞳の少女。腰に刀を、背に弓矢を背負っている。

「…こりゃあ…」

男たちは、少女に釘付けになった。男だけでなく、優花も。

「別嬪なおじょうちゃんだな…」

別嬪、という言葉で片付けられるものではない。言葉で言い表せぬ程、少女は美しかった。年頃の娘にしては地味な色の着物と袴を身に付け、まるで少年のような格好をしている。

「お前も一緒に来てもらおう…今日は何てついてる日だ。」

そう言つて、二人の男が彼女に迫る。しかし、少女は造作もなく男たちの腕をすり抜け、鞘に入れたままの刀で叩き出した。

「…ふん、弱いからこんな所で固まつて、待ち伏せなどしていたんだな。」

突然の彼女の言葉に、男たちは呆氣にとられながらも怒り出す。

「…やっちまえ！」

残りの男たちが、一斉に飛び掛かる。

「…怒っているのは、本当のことを言われたからか？」

麗蘭は呆れて言い放った。

麗蘭は、男たちを全て気絶させて捕まえ、村人に引き渡した。

「怪我はないか？」

少女は優花に問い掛ける。

「うん大丈夫。あいつらやつつけてくれてありがとね。」

そう言っつて、再び麗蘭の姿を見て考え込む。

「…ねえ、貴女が麗蘭？」

太陽色の長い髪に、深紫の瞳。話に聞いていた通りの特徴だし、何より…本当に強い。

「ああ。私は清麗蘭。なぜ私の名を？」

「やっぱりそうか…」

予想していた“麗蘭”とは違うが、漸く本人に会えたらしい。ほっとし、思わず笑みが零れていた。

「私、伯優花。つい此の間から孤校でお世話になってるの。風友さまのお使いで、貴女を迎えに来たのよ。」

「ああ、私を探していたとはそういうことか。それは態々済まぬな。」

麗蘭は、優花の顔を良く見て急にあることに気付く。

「おまえ…ひよっとして半妖か？」

やはり麗蘭は只者ではない、優花はそう思った。普段は妖力と妖気を封じ込める札を持っているので、見破る者はほとんどいないというのに。

「そう。父は人、母は妖の生まれなの。…やっぱ、嫌かな？半妖なんて…」

半妖の社会的な地位は低い。妖怪からは蔑まれ、人間からは疎まれる。優花はその生まれから、此れまで様々な苦労をしてきた過去を持っていた。

「…いや、何故嫌がる必要がある？」

「え？」

優花に気を遣っているのではなく本当に、麗蘭には優花の問いの意味が分からないようだった。

「半妖だからといって、優花は優花だろう。それ以外の何者でもない。しかし、それならさっき私が助けなくとも優花は自分で何とかなったのだな。半妖は妖力を備えているというし…」

余りにも当たり前のように言っただけの麗蘭の言葉に、優花は拍子抜けしてしまった。

「さあ早いところ帰ろう。風友さまが心配なさるといけない。」

微笑む麗蘭に、優花は何だか嬉しい気分になる。麗蘭も、久し振りに友達ができたとの底で喜んでいた。

「お帰り、二人共ご苦労だったね。麗蘭、峨邑はどうだった？」

「ええ、妖怪が出ていた所為か余り活気がありませんでした。大きい街なのですが…こんなご時世だからというのもありましよう。」

麗蘭、優花、風友の三人は主室で寛いでいた。

「麗蘭はいつから妖怪の討伐に加わっているの？」

「半年程前かな…此処のところ国の討伐軍は手が回らないらしい。茗との開戦準備に忙しいのかもしれないが…代わりに有志を募り、討伐しているのだ。」

平時なら、国の軍隊が妖討伐を担っている。しかし人間同士の戦いに備え人手が足りない昨今、麗蘭のように強いと有名な神人や元軍人が国中から各地へ集められていた。

「遠い街からお声がかかるなんて、麗蘭は本当に強いよね。」

「…まあ、武術位しか取り柄がないからな。」

「でも、学問も良く出来るって聞いたよ？」

「買被り過ぎだ。」

麗蘭は困ったように笑む。

「優花は何処から来たんだ？」

「私は紫瑤から。」

「紫瑤？都育ちだったのか。」

「うっん、住んでたのは外れの方だから。両親が死んで…それから、風友さまに引き取ってもらったの。」

優花は風友を見る。本当に、風友には感謝していた。孤児として半妖の優花を引き取ってくれる孤校がなかなか見つからなかったのだ。

麗蘭と優花のやり取りを微笑ましく見ていた風友はすつと立ち上がる。

「優花、食べたら麗蘭の部屋に移りなさい。すっかり仲良くなったようだから。」

「…はい！」

優花も、麗蘭も、嬉しそうに頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4162ba/>

荒国に蘭

2012年1月12日22時54分発行